



Newspaper in Education

NIE ニュース

エヌ・アイ・イー

第97号
2021.2.15

●特集・SDGs 学習に最適な NIE▶1~3 ●第11回「いっしょに読もう！新聞コンクール」受賞者決定▶4~5
●第25回 NIE 全国大会▶6 ●アドバイザー紹介／NIE 実践事例を公開中▶7 ●〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2021年 日本新聞協会

編集・発行 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

SDGs 学習に最適な NIE

国連加盟各国が2030年までに達成を目指す持続可能な開発目標（SDGs）。教育現場では、これからの社会を担う人材の育成が求められており、NIEはその一助となる。本特集の巻頭では、SDGs 学習において「なぜ新聞が最適なのか」を解説し、同時に、小中高の実践事例を先生方に紹介いただいた。

持続可能な開発目標（SDGs）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、15年9月の国連サミットで採択された

「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された国際目標である。そこでは、30年までに持続可能でよりよい世界を目指すための17の目標・169のターゲットが設定され、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っている。

17の目標とは、貧困、飢餓、保健、教育、ジェンダー、水・衛生、エネルギー、経済成長と



東京大学
公共政策大学院教授
鈴木 寛

雇用、インフラ・産業化・イノベーション、不平等、持続可能な都市、持続可能な消費と生産、気候変動、海洋資源、陸上資源、平和、実施手段である。

現在、教育現場でも持続可能な社会を作るために行動する

「人」を育てる教育（ESD）が始まっている。20年度から導入された新学習指導要領でもその趣旨は共有されており、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人間性等の育成などが目標とされ、主体的・対話的で深い学びの重視や、そのための教科横断的に組み立てられた教育課程の編成が盛り込まれている。

SDGs 学習とは、地球規模のさまざまな課題に対して、教科を超えて主体的に取り組んでいく力や態度、価値観を育むものである。

新聞には、目標やターゲットに関連した記事が必ず掲載されている。そして、それらを多角的、横断的な観点からわかりやすく解説している。その解説や社説を読むことで、記事についてのさまざまな立場の意見を深く理解することもできる。それゆえ、新聞に毎日慣れ親しんでいけば、SDGs についての知識と見方・考え方が自然と育まれるのである。

新聞は、同じ記事を複数の生徒が読んで、お互いに議論するための教材として用いることができる点から、対話的な学びにも適しているといえる。互いの意見を理解し、尊重し、それぞれのよさを持ち寄りながら、意見を磨いていくことも可能になるのである。

新聞閲読で自然に習得

では、SDGs 学習で求められる実際に存在する課題について学ぶ際、最も適している教材は何か？——それは、新聞である。

新聞には、目標やターゲットに関連した記事が必ず掲載されている。そして、それらを多角的、横断的な観点からわかりやすく解説している。その解説や社説を読むことで、記事についてのさまざまな立場の意見を深く理解することもできる。それゆえ、新聞に毎日慣れ親しんでいけば、SDGs についての知識と見方・考え方が自然と育まれるのである。

特に、主体的・対話的で深い学びにも新聞は最適である。それは、テレビは受け身で視聴できるが、新聞は読む意欲を持つ

て、主体的にならないと読めないメディアだからだ。加えて、テレビは映像がすぐに消えてしまい、録画しないと再生できないが、新聞はその場ですぐに何度も読み返すことができる。さらに新聞は、同じ記事を複数の生徒が読んで、お互いに議論するための教材として用いることができる点から、対話的な学びにも適しているといえる。互いの意見を理解し、尊重し、それぞれのよさを持ち寄りながら、意見を磨いていくことも可能になるのである。

こうしたことで、自分の考えを形成する思考力、複数の見方・考え方のなかから意見を選び取る判断力、文章を使った表現力も磨かれていく。そして、学びに向かう力や人間性なども育まれるのだ。

以上のように、新聞は学びにとって非常に重要なツールである。今こそ、テレビやスマホだけでなく、新聞をより有効的に活用して、人間と社会と地球の未来について考え、行動できる若者を育てていくべきである。

ジレンマの中で思考を深める



南魚沼市立
中之島小学校 校長
常山 利江

6年生の児童に、社会の中で興味があることを聞くと、新型コロナウイルス感染症（以下、感染症）が最も多く、次いで環境問題や平和となった。また、SDGsや世界の協力を目を向ける児童も多かった。そこで本校6年生では、身近な課題である感染症を社会科の教材としてまず取り上げることとした。

また、経済と環境にも触れ、開発目標にある課題や社会的事象を通して、世界の協力や自分の行動の大切さに気付いてほしいという願いのもと、単元名を「世界を取り巻くコロナウイルスと人類の宿題」と設定し、次の流れで授業を行った。

【1次】新聞記事を開発目標と照らし、感染症が世界の課題であることを捉える。

【2次】①新聞等の資料を活用しながら、世界の国々の連携に気付く。②感染症で世界経済が厳しくなっている状況を捉える。③世界経済と環境を関連付けながら、改善するための行動を考える。④世界の課題の深刻さと解決・改善に向けた取り組みの大切さに気付く。

【3次】10年後の世界を少しでもよい世の中にするためにできることを考え、表現する。

1〜2次前半では、コロナ禍で疲弊する医療の立場で話し合い、2次中盤以降は経済と環境など、医療とは別の複数の立場で話し合った。元々両立に課題がある環境と経済をテーマにすると、どちらも守らなくてはならないというジレンマに陥った。この状況で友達や自分自身と対話することで、迷いながら思考を深める児童の姿がみられた。

社会の課題を一つの視点から



掲示された新聞で考えを深める児童

解決することは難しい。児童は、いくつもの立場の主張を総合的に判断する大切さを学んでいた。そして、感染症や世界の課

私には、NIEを4校で十数年にわたり実践し、生徒の知的好奇心を喚起するよう心掛けてきた。例えば、生徒が新聞記事を選ぶ際は、日頃から気になってきた問題に紐付けるよう指導している。その際、記事を選んだ



山口県立
下関中等教育学校 教諭
戸嶋 博光

ジェンダーテーマに発表会も

理由を明確に説明させるようにしている。NIEとは、生徒自身の学びに向かう心とつながる営みでもあるからだ。

特に近年、生徒の心に二つの迷いがあることに気づく。一つ目は、この社会の「サステナビリティ」への不安。二つ目は、自分自身が「社会によりよく参画したいという願い」である。NIEで、これらを掘り起こすことを考えて実践していたとき、

題にどう取り組むのかを判断し、今できることを探る発言が多く出された。

2019年度にNIE実践指定校となつてからの2年間のNIE学習では、児童は発達段階に合わせて多くの新聞に触れてきた。新聞を読むことで事実を知るだけでなく、記事に込められた多くの考えを学ぶことにもつながった。

6年生の姿をみてみると、この活動の積み重ねを通して、社

SDGsの17の目標は、生徒全員の学びの道しるべとなった。というのも、漠然としていた課題意識が整理され、社会の見方への自分なりの軸を持つことができたからだ。つまり、新聞とのつき合い方に一定の目的を持つようになるのである。結果として、生徒はより強い意図で新聞に対峙し、根拠ある適切なテーマ設定が可能となる。

例えば、同じ目標に興味を持

会の変化に関心をもち、諸課題について自分の考えをしっかりとって分析・説明する力が付いてきていることを実感する。特に、SDGsのように児童には難しいと思われる地球規模の課題でも、日頃から新聞と身近に触れ合いながら培ってきた力があるがゆえに、学びを深めることができた。この力は、児童にとって予測できない未来を生き抜いていく、確かな礎となるに違いない。

SDGsと出合った。

まわし読み新聞でAL

特集 SDGs 学習に最適な NIE

つ別の生徒の「まわし読み新聞」を読んだとき、ある生徒は、他の生徒との視点や立場の違いを思考のエネルギーにした（写真）。多様な情報からより良い情報を選び取り、発信する力を体現したアクティブラーニング（AL）の成立だった。社会を学び、自ら考え、行動し、変え

継続的な記事読読と壁新聞制作



兵庫県立
武庫荘総合高等学校
教諭
山村 康彦

本校では、朝のショートホームルームで短い記事を継続して読む「Manabee Morning」（MM）を実施している。また、新聞委員による壁新聞（MCニュース：Mukonosu Comprehensiveの略）に新聞記事を活用してきたが、2019年度からはSDGsと関連した内容を取り上げている。

全校生が取り組んでいるMMは、10年ほど前から週2回A5サイズの用紙に収まる短い記事を紹介してきたが、昨年度からはSDGsの17の目標（ゴール）から記事に関連するアイコンを付けて配布している。今年度は週1回の実施を目的とした。用紙サイズをA4にしたため、社会の動きや課題に気付けるような大きな記事も選ぶことができた。

新聞を活用することで、教科書だけでは取り上げにくい最新の事象でも取り入れやすくなる。また、生徒同士、教師と生徒のコミュニケーションの一助になることも期待している。



まわし読み新聞を作成する生徒

が、以前より明瞭になったのである。また今年度の中学1年生のNIE活動では、ジェンダーについての学習が個々の意識を高め、他のさまざまな活動にも波及した。一例として、中1から中3（前期生）で行った意見発

表会で各クラスの代表者は新聞を活用して、人権や多様性を意識したテーマで発表することができた。生徒の投票で最優秀となった論題は「同性婚が認められると、あなたにどんな不利益がありますか？」だ。同性婚を社会が認める前提でテーマを設定したことなどに評価が集まった。

時間を忘れるほど夢中に

MCニュースは、1年生の新聞委員が取り組んでいる。各クラスの3人の委員が、みんなに読んでほしい記事を自由に選んできたが、昨年度からは、クラスごとにSDGsの目標から一つ選び、「SDGs壁新聞」として製作している。

最初は新聞委員の仕事として受動的だったが、書き上げていくうちに「時間を忘れるくらい真剣に取り組めた」という前向きな感想もあった。1人だけで読むよりも、みんなと話しながら読むほうが理解も深まり、興味を持って取り組んでいると感じた。



SDGs 壁新聞

まず、各委員がテーマに沿った記事をたくさん切り抜き、その中から壁新聞に載せるものを選び、記事に関するコメントを考えた。模造紙には、タイトルに選んだSDGsの目標を書き、大きなアイコンと新聞記事を貼付した。次に、レイアウトを考えながら、コメントを書き込んでいった。「みんなでコメントを書いて大変だった」と苦労した様子だったが、全体としては好評であり、「新聞を読む機会を増やしたい」と答えた委員も多かった。

全体として見渡すと8クラスで八つの目標を取り上げているため読み応えがあり、教師間でも高評価であった。今後も、生徒が社会への関心を高め、持続可能な社会のつくり手となることを目指し、新聞を活用した実践を継続していきたい。

第11回

いっしょに読もう！新聞

コンクール
受賞者決定

第11回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の受賞者が決まった。ニュースパーク（日本新聞博物館・横浜市）で予定していた表彰式は、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せないため中止となったが、受賞者が通う学校と当該地域のNIE推進協議会の協力を得て、各地での表彰が実現した。
審査委員長の小原友行氏（日本NIE学会顧問、福山大学教授）に今回のコンクールの講評をいただいた。

はじめに、個人賞として最優秀賞、優秀賞、奨励賞を、学校賞として優秀学校賞、学校奨励賞をそれぞれ受賞された皆さんに、審査会を代表して心よりお

祝いを述べたい。また、戦後75年目の本年度、コロナ禍にもかかわらず途切れることなく11回目のコンクールが実施できたことに関して、関係者各位のご尽

小学生部門最優秀賞 伊藤 穂乃花さん
(大口町立大口西小学校5年・愛知県)



右から伊藤さん、石川保典愛知県NIE推進協議会事務局長
(中日新聞社提供、2020年12月23日)

選んだ記事：「『人は違う』 私から学んで 視覚障害の学生 教員試験に挑む」(中日新聞2020年6月14日付朝刊)

伊藤さんのコメント：障害の有る無しに関わらず、だれもが活躍できる社会になってほしい。それを、一人でも多くの人に伝えたい。

力に深く御礼申し上げたい。

特色示す三つの鍵

次に、コンクール全体について講評する。今回の特色を示すキーワードとしては、「コロナ禍にもかかわらず」「深い学びを引き出す」「葛藤やジレンマを克服するために」の三つを指摘しておきたい。

第一の「コロナ禍にもかかわらず」とは、思うように学校での学習ができない深刻な状況下にもかかわらず、予想を超え、47都道府県と海外から、例年以上の応募がなされたということである（件数は後述）。コロナ禍のような状況だからこそ、ライフラインの一つでもあり、正確な情報源である新聞のニュースが、教科書には掲載されていない最新の教材として求められたということではないだろうか。指導された先生方の熱い思いを強く感じた。

中学生部門最優秀賞 三浦 友愛さん
(土佐中学校3年・高知県)



三浦さん (高知新聞社提供、2020年12月24日)

選んだ記事：「容疑者救命 京アニ事件主治医の記録」(高知新聞2020年5月28日付朝刊ほか)

三浦さんのコメント：記事を書かれた記者さんから温かいメッセージをいただき、本当にうれしい。毎日、新聞に目を通す習慣を続けていきたいと思う。

第二の「深い学びを引き出す」とは、本年度が、「主体的・対話的で深い学び」を求め、新学習指導要領の小学校での全面実施の年度でもあり、受賞作の多くがこれを強く意識した学びの成果として表現されていたことである。その主な要因は、本コンクールの形式および内容が、新学習指導要領の掲げる課題に應えるものであったということも重要だ。受賞作に共通する魅力は、興味・関心をもった記事を深く読み込んだ上で（主体的）、他者と意見や考えを

交流し（対話的）、自分の考えをより深めたうえで提言をする（深い学び）という、NIE学習ならではの「アクティブラーニング」の成果が表現されていたということである。
そして第三の「葛藤やジレンマを克服するために」とは、小中高の各部門の最優秀賞・優秀賞の作品中に、近年の社会変化の中で生まれてきた「葛藤やジレンマ」を克服して、希望の物語を見つめる、伝える、そして創り出そうとする意識や考えがみられたということである。



福山大学
人間文化学部教授
小原 友行

「障害者との共生」「米国の黒人差別」「京アニ事件の容疑者救命」「ALS女性の生と死」「AIの進歩への対応」「コロナ禍の中の民主主義」など、現代社会が抱える正解のない問題に真摯に向き合い、自らの生き方を深く考えながら、コロナ禍を乗り越えた未来への希望を発信しようとする作品が多かったこと

高校生部門最優秀賞 山口 歩乃果さん
(西南女学院高等学校2年・福岡県)



左から山口さん、小田泰司福岡県 NIE 推進協議会会長
(西日本新聞社提供、2020年12月15日)

選んだ記事：「デジタル VS：AI に著作権はあるか」
(毎日新聞2020年5月17日付朝刊)
山口さんのコメント：著作権の問題に限らず、社会のいろいろなことに興味を持ち、新聞を読んで知りたい。

未来を創造する力

は、審査員に共通する感想であった。なお、本年度の最終審査会は初めてオンラインで行われた。新聞教材には、社会をよりよいものに変革し、私たちの未来を創造していくための「もう一つの学力」を育む教育力があること気づかせてくれる話し合いになったと考える。この力は、「未来を創造する力」とでも表現できるかもしれない。このことに気づかせてくれたコンク

優秀学校賞受賞校

(15校)

- 岩手県 軽米町立晴山小学校
- 秋田県 横手市立植田小学校
- 東京都 板橋区立金沢小学校
- 京都府 伊根町立本庄小学校
- 沖縄県 名護市立小中一貫教育校緑風学園
久志小学校・久志中学校
- 岩手県 九戸村立九戸中学校
- 秋田県 横手市立横手明峰中学校
- 埼玉県 戸田市立美笹中学校
- 東京都 山脇学園中学校高等学校
- 福井県 小浜市立小浜第二中学校
- 茨城県 茨城県立水戸高等特別支援学校
- 長野県 長野県上田千曲高等学校
- 愛知県 名古屋市立名古屋商業高等学校
- 福岡県 福岡県立小倉南高等学校
- 佐賀県 佐賀県立小城高等学校

ルの参加者にあらためて御礼申し上げます。これからのNIEで育った子どもがデザインする、未来の希望の物語に大いに期待したい。

◇ ◇

今回は47都道府県と海外から作品が寄せられ、応募数は計5万7977編（小学生6066編、中学生2万4616編、高校・高等専門学校生2万7295編）だった。

1次、2次、最終審査会を経て、小中高校各部門の最優秀賞を1編ずつ、優秀賞を校種別に各10編、奨励賞を計120編選

優秀学校賞（代表校）

小浜市立小浜第二中学校・福井県



左から福井県 NIE 推進協議会賞受賞の重田京香さん（3年）、林一花さん（1年）、加福秀樹校長、佐々木弘行福井県 NIE 推進協議会顧問（福井新聞社提供、2020年12月18日）

加福校長のコメント：よりよい教育を目指す上で新聞をどう使えるのだろうか、という姿勢で学校行事や学活、授業など全ての教育活動で新聞を活用してきた。持続可能なNIEに向け、今後も自然な形で新聞を取り入れたい。

の中から、優秀学校賞を小中高校各5校の計15校、学校奨励賞を158校選んだ。

第12回コンクール募集中

新聞協会は第12回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の募集を始めました。対象は小・中・高校（高専）生です。2020年9月9日から21年9月7日までの新聞から興味を持った記事を選び、家族や友達と話し合い、気付いた意見を応募用紙に記入してお送りください。締め切りは9月8日（必着）です。応募要領はNIEウェブサイト（https://nie.jp/monthlycontest_newspaper_2021/）をご覧ください。

第25回NIE全国大会 東京大会 オンラインで初開催

2020年11月22日、第25回NIE全国大会東京大会が新聞協会会議室で開かれた。新型コロナウイルス対策で大会史上初のオンライン開催となり、特設サイト (<https://nie2020tokyo.jp/>) では関連動画が2月28日まで視聴できる。ライブ中継された全体会では、小説家の真山仁氏が記念講演したほか、コロナ禍の今、NIEで培う力について話し合う日本NIE学会との共同シンポジウムが開催された。

大会では、小中高計9コマの実践発表、行政を挙げた活動の紹介、解説動画「NIEはじめの一步」を公開している。ここでは実践発表を東京都NIE推進協議会の白戸一範事務局長に紹介いただく。



東京都NIE推進協議会事務局長
白戸一範

①「学校全体で取り組むNIE」新聞をフル活用」国分寺市立第五小学校では、情報を取捨選択し、読み解く力を育むことを目指す。全学級での新聞の教材化、週1回行う「NIEタイム」のほかにも委員会活動や研修会の実施など、組織的な取り組みのモデルを示した。

②「持続可能な言語能力の育成」読み書き能力を伸ばす実践」江戸川区立南篠崎小学校の堀口

友紀主幹教諭は、子どもの語彙を増やしながらか、既存の知識と関連付け、短くまとめて表現する力が重要であると考える。学年ごとの体系的な「書くこと」指導にNIEを継続して位置付けた。

③「課題発見解決能力の育成」新聞で社会とつながる」文京区立関口台町小学校の矢野篤彦教諭は、児童が自ら課題を見つけ、解決する力が重要だと考える。新聞記事の見出しや写真を活用し、実社会とのつながりを意識しながら、自ら課題を発見する学習を探究した。さまざまな視点から児童の変容の「見え

る化」に挑戦している。

④「新聞を活用して意見形成を図る実践」世田谷区立船橋希望中学校の渡邊是能教諭と末松紗歩教諭は、新型コロナウイルス関連記事を教材化した。生活や心情の変化、医療従事者や感染者に対する偏見や差別問題など、時宜を得た内容を演劇形式にして学びを深めた。



写真1 チャートの説明をする木村要介教諭

⑤「新聞を通して社会を見つめる」投書で「特別の教科 道徳」世田谷区立喜多見中学校の木村要介教諭は、他校2人の教師と共同で、投書を活用し、生徒が多面的・多角的に考え、課題に対して主体的に向き合うことを目指した。チャートなどのツールで思考を見える化し、生徒の意見の変化を四つに分類するこ

とで、考え、議論する道徳に迫った(写真1)。

⑥「言葉を見つめる」新聞の写真素材に俳句を創作する」町田市立真光寺中学校の山田慎一主幹教諭は、写真を豊富に掲載する新聞を俳句の題材に活用した。季節や生活の様子を切り取った写真によって、学校周辺の題材探しでは広がりがなく、俳句の「切れ」を感じにくいなどの課題の解決を図った。

⑦「実社会と国語を結び付けるための授業」NIEの実践を通して」東京都立第三商業高等学校の高倉愛理沙教諭は、J Aや地元企業、商店会、葛飾区などと連携する前任校の実践教育を行う中で新聞を活用した。「基礎的な新聞の読み方を身に付ける」など四つの狙いを設定し、2年間継続して実践することで、さまざまな立場や年齢の人がいる社会と関わる上で必要な表現力の育成などを目指した。

⑧「新聞で世界とつながり、共に考えるNIE」多国籍生徒たちの挑戦」都立新宿高等学校の高橋伸明教諭は、外国にルーッ



写真2 授業を受ける生徒たち

のある生徒が多く在籍する前任校で、グローバルに活躍が期待される生徒が世界の動向や課題に関する知識を深めることを目指した。「SDGs×新聞」「日本語教育×新聞」など、日常的に新聞で学ぶカリキュラムを通して展開した(写真2)。

⑨「18歳成人とNIE」大人になることについて考えよう」都立荻窪高等学校の代田有紀主任教諭は、2022年に成年年齢が18歳に引き下げられても、「心が大人」であるかは別であると考える。「大人になるとはどういうことか」を生徒に問い、精神的自立や経済的自立などに向き合わせるため、さまざまな立場の意見に触れることのできる新聞記事を活用した。

NIEアドバイザー紹介

- ①学校名 ②担当教科 ③NIE 実践歴
- ④新聞を活用するうえでの工夫を一言

(敬称略)



●岩手県
及川 敏彦
(おいかわ・としひこ)
①一戸町立奥中山小学校
②社会科 ③1年
④子どもが新聞を自由に活用し親しめるよう、校内にあるNIEコーナーの掲示方法や新聞ラックの整備等、学校司書と連携して取り組んでいる。



●千葉県
大塚 功祐
(おおつか・こうすけ)
①千葉県立国府台高等学校
②地歴公民科 ③12年
④主権者教育に活用。各政党の政策比較や社会の課題を議論する際に新聞5紙の記事を示し、生徒から多様な意見が出るように促す。



●富山県
中 英美
(なか・ひでみ)
①富山県東部教育事務所
②国語科 ③7年
④子どもが目を輝かせる記事や深く考える必要のある記事を取り上げ、対話を通して、思考力、判断力、表現力等を育むこと。



●富山県
能瀬 明
(のせ・あきら)
①富山県東部教育事務所
②国語科 ③6年
④日常生活との関連が深く、児童生徒が自分ごととして受け止められて主体的な対話に役立つ記事を日々収集しておくこと。



●福井県
古家 博美
(こか・ひろみ)
①勝山市立村岡小学校
②全科 ③4年
④社会と子どもをつなぐツールとして、記事探しや新聞づくりなど、さまざまな形で新聞と関わらせ、実践を継続していくことが大切である。



●福井県
前川 史典
(まえがわ・ふみのり)
①鯖江市豊小学校
②社会科 ③6年
④「気軽に手軽に、いつでもどこでもだれでもNIE」が合言葉。気負わず、構えず、気ままに教材づくりができることが、教員にとっての新聞活用のメリットである。



●福井県
齊藤 幹郎
(さいとう・みきお)
①あわら市金津中学校
②技術・家庭科技術分野担当 ③4年
④授業開始時、「今日の新聞に書かれていたのだけど…」とさまざまな記事の紹介をルーティンにすることで、子どもの新聞に対する関心を高めている。



●兵庫県
近藤 隆郎
(こんどう・たかお)
①神戸山手女子中学校高等学校
②社会科 ③13年
④「新聞で教室を社会とつなげよう！」をテーマに実践。校内閲覧後の紙面の持ち帰りを可とし、家族とともに読む機会を設けている。



●兵庫県
瀧口 梓
(たきぐち・あずさ)
①兵庫県立川西明峰高等学校
②国語科 ③9年
④「競争しながらするワークシート」「小論文の練習になる新聞スクラップ」など、生徒の求めに柔軟に対応できるよう心がけている。



●佐賀県
岩崎 達義
(いわさき・たつよし)
①佐賀市立東与賀小学校
②全科 ③5年
④子どもの目線で思考するよう心掛けている。「どうしてだろう?」「なぜだろう?」を丁寧に取り扱い、思考を広げるようにしている。

NIE 実践事例を公開中

NIE ウェブサイトでは、新聞を活用した教育実践事例1300件超を掲載しています(<https://nie.jp/report/>)。教科、校種の内訳は表のとおりです。今後も更新していきますので、ぜひ、ご活用ください。



●佐賀県
田中 裕子
(たなか・ひろこ)
①神崎市立西郷小学校
②全科 ③4年
④学習のまとめを新聞形式にしたり、毎月児童全員にA5判用紙にニュースを書かせたりしてきた。子ども新聞も購読するなど、新聞に親しませている。



●宮崎県
馬原 祐介
(まはら・ゆうすけ)
①宮崎県教育庁義務教育課
②中学校社会 ③中学校勤務の数年間
④社会的事象を身近に感じられるよう、生徒たちの生活経験と結びつけながら新聞記事を活用してきた。

	国語	社会	英語	算/数	理科	生活	音楽	図工	技/家	保体	道徳	総合	特活	キャリア	ほか
小学校	291	163	4	14	30	36	5	16	5	7	46	171	51	—	45
中学校	158	217	18	9	17	—	5	10	17	13	52	105	57	—	59
高校	72	102	11	4	10	—	—	4	29	5	1	72	15	53	69
特別支援	21	11	—	—	1	—	1	1	1	—	2	8	2	4	18

※1つの事例が複数の教科にまたがる場合もある



総合的な探究の時間に新聞記事を活用して、1学年で「碑の記憶」に、2学年では「復活の記憶」に取り組んでいる。この探究は、過去の震災から学び、ふるさとの復活の軌跡をたどり、新しい価値を創造する目的を持つ。岩手日報社に依頼し、新聞の提供や講義をしてもらっている。記事によって、生徒は過去を学び、現在を振り返り、未来に思いを巡らせることができる。生徒の思考を時間軸上で深める役割を果たしている。

岩手県下閉伊郡山田町は、明治三陸大津波・昭和三陸大津

事務局長から一言

岩手県立山田高等学校は昨年度から「碑の記憶」を、今年度から「復活の記憶」をスタートさせ、新聞を活用した新たな復

波・チリ地震津波と、近代以降三度にわたる甚大な人的被害を受けている。そして、約10年前に、東日本大震災を経験した。

災害の歴史は、数十年おきに繰り返されている。過去の教訓はなぜ生かされなかったのか……。この疑問から

岩手県立山田高等学校

教諭 岩館 巧磨

◎岩手県下閉伊郡山田町／校長・宮 学／生徒数・112人
◎特色…岩手県沿岸部に位置する全日制普通科の小規模校。1980年代には1学年6学級編成であったが、少子高齢化と東日本大震災の影響もあり、今年度から1学級編成となっている。地域課題の解明を通じて、普遍的価値の創造に主体的に取り組む生徒の育成や、浜辺を利用して「海の運動会」等、特色ある学校行事に取り組んでいる。



記事を読んで考えを深める生徒



100年以上前の新聞で話し合う生徒

興教育で注目されている。

東日本大震災発生から間もなく10年を迎える。今後は被災地でも震災を直接知らない子どもが育っていく。生徒は新聞で当時の様子や被災者の心情を知り、

石碑を訪れて話を聞くことで、体験を通したりアリティーとともにも教訓を学んでいる。

3学年を通じた探究のサイクルもできつつある。住民や自治体も関わり、デジタルの手法も

生まれたのが「碑の記憶」である。先人の思いをつなぐ石碑や明治から昭和初期の記事を題材として、生徒は探究を重ねていく。そして、岩手日報で連載中の「碑の記憶」を読み、生徒はふるさとの歴史を紐解き、語り部の思いを学ぶ。新聞を媒体として、生徒は学びを深めている。「ふるさととはどのように復活しつつあり、どのような課題を抱えているのか」。これは、多くの新聞記事を通して先人の思いを学んだ生徒たちが気付いた「問い」である。「復活の記憶」では、山田町の復興の軌跡をたどり、水産業や観光資源に目を向けた探究が実施された。

生徒は、NIE活動を通して、客観的な視点や多種多様なものの見方や考え方を身につけている。

取り入れた試行錯誤の実践だが、新聞で過去を学び、地域の未来について意見を交わす生徒たちの姿に頼もしさを感じる。

(岩手県NIE協議会事務局長・佐藤成人)



コロナ禍の2020年前半、群馬県のNIE活動もほとんど機能不全に陥った。前年に67回担当した社の出前・新聞講座も1学期はゼロ。2学期に入ってからようやく動きだし、講座を18回実施した◆そんな状況下で「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募が前年の7倍強の664編もあった。新聞協会に寄せられた総数が5万7977編(前年は5万7561編)ということを考えると、飛躍的に増えた形だ。常連校に加え、新規の応募が倍増した。これまでに夏休みの宿題として参加してもらった形が多かったが、今回は「休校中に生徒が書いた」と、学校再開早々に学年分を持って来てくれた高校もあった◆休校中に「絶好の教材」として、新聞に目を向けてくれた教育現場の人たちがいたことは心強い。一過性とせず「新聞の応援団」を今年もさらに増やしていきたい。(上毛新聞社・子安 悟)